

【公報種別】実用新案法第 14 条の 2 の規定による訂正明細書等の掲載

【部門区分】第 5 部門第 2 区分

【発行日】平成 19 年 9 月 27 日 (2007.9.27)

【登録番号】実用新案登録第 3122233 号 (U3122233)

【訂正の登録日】平成 19 年 7 月 13 日 (2007.7.13)

【登録公報発行日】平成 18 年 6 月 8 日 (2006.6.8)

【出願番号】実願 2006-1998 (U2006-1998)

【国際特許分類】

**F 1 6 B 15/02 (2006.01)**

【F I】

F 1 6 B 15/02 R

【訂正書】

【提出日】平成 19 年 5 月 18 日 (2007.5.18)

【訂正の目的】実用新案登録請求の範囲の減縮及びこれにともなう明りょうでない記載の釈明

【訂正の内容】

【考案の詳細な説明】

【考案の名称】釘針

【技術分野】

【0001】

本考案は一種の釘針構造、特に一種の二つの接合部材を安定に固定し、弛めによる離脱を避けることができる。

【背景技術】

【0002】

図 1 に示すとおり、公知技術の釘針 1 は、棒体 11、および棒体 11 両端に棒体 11 と 90 度を呈した針脚部 12 より構成する。棒体 11 と針脚部 12 の周縁は滑り表面を有する円柱体を設け、使用のとき、棒体 11 に直接力量を掛けて、針脚部 12 を二つの接合部材 2 に打ち込み、針脚部 12 が完全に打ち込まれた後、二つの接合部材 2 を確実に掛けて、一体化にする。

【0003】

しかしながら、釘針 1 使用後に以下の問題が発生する。

1. 棒体 11 は滑り表面の円柱体であり、釘ガンまたはハンマーなどの工具を使用しても、力量を棒体 11 へ有効に働くことができないため、釘針 1 に対する圧迫力が不足し、針脚部 12 を打ち込み速度を遅くさせるほか、釘針 1 の打ち込み方向に偏りがあると、釘針 1 を垂直に二つの接合部材 2 に打ち込むことができない。針脚部 12 の曲げにより釘針 1 を打ち込んだ後の結合効果が減少される。

さらに、釘針 1 を打ち込んだ後、棒体 11 は滑り表面のため、棒体 11 を二つの接合部材 2 へ完全に打ち込むことができない。棒体 11 は二つの接合部材 2 に止まり、外力の振動などにより、釘針 1 は二つの接合部材 2 をしっかり固定できたいため、二つの接合部材 2 の間に滑りや弛むなどを引き起し、二つの接合部材 2 間の接合効果に影響する。

2. 針脚部 12 は滑り表面の円柱体であるため、針脚部 12 を打ち込まれた後、部材 2 との接合力が良くない。部材 2 は外部の振動などの影響で、二つの接合部材 2 は横向きと縦向きの作用力量により、横方向と縦方向に揺れて、針脚部 12 が二つの接合部材 2 から抜け出す恐れがある。よって、公知技術の釘針 1 の接合効果が良くない。

【考案の開示】

【考案が解決しようとする課題】

【0004】

本考案の主な目的は、一種の釘針を提供し、使用することにより、弛むまたは抜け出しを

防止できるほか、打ち込まれた後、二つの接合部材を安定に固定し、滑り移動しない。

【0005】

前記の目的を達成するため、本考案は主に、棒体、および棒体両端から外部に延ばす針脚部より構成する。針脚部に傘歯形を設け、釘針を部材に打ち込んだ後、確実に接合できるため、外部の振動などに影響を受けない。二つの接合部材間の接合効果を確保する。

【課題を解決するための手段】

【0006】

請求項1の考案は、棒体、および棒体両端に延ばしてした針脚部より構成し、針脚部に複数の傘歯形を設け、すべての傘歯形に棒体方向と平行した係止め面を設けて、係止め面の反対方向に環状錐面を設け、該棒体表面に針脚部と反対方向に平坦部を設け、針脚部と同じ方向に鋭い部を設けることを特徴とする釘針。

請求項2の考案は、請求項1記載の釘針において、棒体の断面は三角形であることを特徴とする釘針。

【考案の効果】

【0007】

本考案の新型針釘は主に、棒体、および棒体両端から外部に延ばす針脚部より構成する。そのうち、針脚部に傘歯形を設け、傘歯形に棒体方向に向かって、棒体と平行に設ける係止め面を設ける。この係止め面と反対方向に設ける環状錐面を設け、針釘を打ち込んだ後、より良い安定性を提供するほか、振動などの外部要因による弛めを避ける。さらに、棒体に平坦部と鋭い部を設け、釘針を二つの接合部材に打ち込むとき、二つの接合部材を安定に接合し、滑り移動を避ける。

【考案を実施するための最良の形態】

【0008】

図2に示すものは、本考案の釘針3の一好ましい実施例である。主に棒体31、および棒体31両端に延ばした針脚部32より構成する。針脚部32はこの図において、棒体31に対して90度方向に設け、針脚部32上に複数の傘歯形321を設け、すべての傘歯形321も棒体31に向かって、棒体31と平行した係止め面322を設け、係止め面322の反対方向に環状錐面323を設ける。

【0009】

図3に示すとおり、使用するとき、釘針3を二つの接合部材4上部に置き、棒体31に力量を加えて、針脚部32を打ち込む、針脚部32が完全に打ち込まれた後、針脚部32は部材4内部の木材繊維の弾性回復働きにより、針脚部32の傘歯形321を包囲し、係止め面322の係止めにより針脚部32を部材4内部に係止めて、ゆるむまた抜け出す防止効果を実現する。

【0010】

図4に示すものは、本考案のもう一つの好ましい実施例である。主に棒体31、および棒体31両端から外部に延ばす針脚部32より構成する。部品と構造とも実施例1に同様のため、詳細説明を省略する。この棒体31表面に針脚部32と同じ方向の鋭い部311、および針脚部32の反対方向に平坦部312をそれぞれに設けることによって、棒体31の断面を本実施例に示す三角形態様を形成する。

【0011】

使用するとき、針脚部32を打ち込まれた後、部材4内部の木材繊維の包囲力により、部材4内部に係止められ、ゆるむや抜け出す防止効果がある。さらに、棒体31の鋭い部311を二つの接合部材4表面に打ち込み、棒体31を二つの接合部材4の内部に収容させる。このため、外力の振動などがあっても釘針3はなお二つの接合部材4に確実に固定でき、二つの接合部材4が滑り移動を防止し、二つの接合部材4間の結合効果を向上できる。

【0012】

前記の説明により、本考案と公知技術のものと比較すると、本考案は以下の長所と効果あることが分かる。

１．針脚部３２上に傘歯形３２１の突き出し構造により、針脚部３２を打ち込んだ後、二つの接合部材４間の接合力量をより確実にし、外力の振動などがあっても針脚部３２は弛むにより二つの接合部材４から抜け出すことがなく、二つの接合部材４の分離を防止できる。

２．棒体３１は鋭い部３１１と平坦部３１２より構成するため、工具で打ち込むとき、すべての力量が棒体３１に働き、釘針３の針脚部３２を素早く打ち込み、釘針３に対する偏り力量により、針脚部３２を二つの接合部材４へ垂直に打ち込むことができる。針脚部３２の曲げを避ける。

【００１３】

さらに、釘針３を打ち込んだ後、棒体３１の鋭い部３１１は二つの接合部材４へ完全に打ち込むことができる。外力の振動などがあっても、釘針３はなお二つの接合部材４を確実に固定できるため、二つの接合部材４間の滑り移動が発生しない。二つの接合部材４間の安定接合効果を向上できる。

【００１４】

前記した本考案は針脚部の傘歯形構造により、釘針を打ち込んだ後、抜け出す防止効果を有するほか、棒体の平坦部と鋭い部を設けて、二つの接合部材の抜け出しや移動を防止できるため、本考案の目的を確実に実現できる。

【図面の簡単な説明】

【００１５】

【図１】 公知技術の釘針の使用態様図である。

【図２】 本考案の好ましい実施例の立面図である。

【図３】 本考案の好ましい実施例における釘針を部材に打ち込まれたときの断面図である。

【図４】 本考案もう一つの好ましい実施例の使用態様図である。

【符号の説明】

【００１６】

３ 釘針

３１ 棒体

３１１ 鋭い部

３１２ 平坦部

３２ 針脚部

３２１ 傘歯形

３２２ 係止め面

３２３ 円錐面

４ 部材

【実用新案登録請求の範囲】

【請求項１】

棒体、および棒体両端に延ばしてした針脚部より構成し、針脚部に複数の傘歯形を設け、すべての傘歯形に棒体方向と平行した係止め面を設けて、係止め面の反対方向に環状錐面を設け、該棒体表面に針脚部と反対方向に平坦部を設け、針脚部と同じ方向に鋭い部を設けることを特徴とする釘針。

【請求項２】

請求項１記載の釘針において、棒体の断面は三角形であることを特徴とする釘針。